

生活史から読み解く生活風景に関する一考察

尾野 薫¹・星野 裕司²・増山 晃太³

¹ 学生会員 熊本大学大学院 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号
Email: 101d9401@st.kumamoto-u.ac.jp)

² 正会員 博士(工) 熊本大学大学院 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号
Email: hoshino@kumamoto-u.ac.jp)

³ 学生会員 工修 熊本大学大学院 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号
Email: 061d9412@st.kumamoto-u.ac.jp)

本研究は、生活史を読み解くことで、人が生活風景をどのように捉えているのか、その認識構造を明らかにすることを目的としている。研究対象には『街は記憶する』という書籍を選定し、松下文法を基に分析対象の抽出、クロス集計、図化を行った。分析対象として抽出された全名詞句の分類、クロス集計を行うことで、生活史に含まれる要素の特徴を把握した。そして、図化の結果から、包括要素が面的集合によって記憶の集合体を形成していると考察した。また、包括要素の重複型における繰り返し要素は、記憶の集合体である包括要素を点的結合によって繋ぐ結節点として機能していると推察した。最後に、包括要素は地域の記憶を活かしたまちづくりへ、繰り返し要素は複数人物の体験を繋ぎ合わせる景観検討へ活用できることを示唆した。

キーワード: 生活風景, 生活史, 松下文法, 図化, 認識構造

1. 背景・目的

人は、「あの場所から見るこの景色がいい」「あの頃はここで誰と遊んでいた」「かつて誰がどのあたりに住んでいた」など、生活の中で身近に存在しているものを風景として認識している¹⁾。そして、様々な場所で、数多くの人と関わりながら認識する生活風景は、体験として記憶に残る。記憶された体験の全体像を構造的に把握する研究は数多く行われており、風景計画や空間の操作の基礎資料として利用されている^{2) 3) 4)}。つまり、体験は、生活風景を考える際のひとつの基盤であるといえる。こうした体験を人がどのように認識しているのか、その認識構造から生活風景の構造を理解する一助となると考えられる。また、人の生活風景の構造を理解することで、普段生活している空間構成を把握することに繋がる。そして、この空間構成から、まちづくりや景観検討を行う際に活用できる視点を得られるのではないだろうか。

以上より、本論は人が生活風景をどのように捉えているのか、その認識構造を基盤となる体験から把握することを目的とした。

2. 既往研究の整理・比較

(1) 本論の位置付け

生活風景の認識構造や形成要因を明らかにする研究において、対象となる風景にはいくつか種類がある。そのひとつに、人が経験し知覚することで記憶した風景が、更に経験によって蓄積・醸成されることで得られる心象風景がある。「良好として思い起す風景」⁵⁾⁶⁾「思い描く農村の風景」⁸⁾「印象的な風景」⁹⁾など、調査時に心象風景の特定を行うことで、人の記憶の中に残る風景とその構造、形成要因等について考察している。一方で、山口ら¹⁰⁾は、生活史について聞き取り調査を行い、心象風景について考察した。これは、生活史が人の思い出として残っている生活風景全般を含んでおり、それは様々な体験とともに記憶されているからである。しかし、山口らの研究では「記憶している周辺の風景と、それにまつわる思い出」についての聞き取り調査を行っており、生活史という体験からわかる生活風景を扱っているとは言えない。よって、本研究では、体験を記録した生活史を読み解くことで、生活風景の認識構造を把握することとした。

また、記憶や認識構造を明らかにする研究において、アンケート結果や文章などの言葉が分析対象となる場合が多い。これらの言葉は、文法等に基づいて抽出した言葉をひとつのデータとして数値や種類に置換し、客観的に捉えようとする場合¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾が多い。これは、言葉の意味解釈には調査者の主観が入ることで、信頼性が欠けてしまう可能性が高いからである。また、言葉というデータを用いて客観的に認識構造を分析する場合、しばしば図化という手法が用いられる。図化にも様々な種類があり、マッピング法¹⁵⁾¹⁶⁾、イメージマップ¹⁷⁾¹⁸⁾、ハイパーテキスト¹⁹⁾、動態的風景記述モデル²⁰⁾²¹⁾等が挙げられる。こうした既往研究より、抽出した要素の分布や認識構造等を明らかにする上で図化は有用であるといえる。しかし、これらの手法は抽出した言葉の意味から図化しており、抽出に利用した文法構造をもとにしていないと考えられる。よって、本研究では、より客観的に分析を行うために、言葉の抽出に利用した文法を用いて図化を行うことを試みる。

以上より、本研究は、体験が記録された生活史について、文法に基づいた名詞句の抽出を行い、文法における言葉同士の関係性からルールを作成し図化を行うことで、生活風景の認識構造を明らかにする。

(2) 研究対象の選定

本研究では、山口ら²²⁾の研究と同様に生活史を研究の対象とすることが最適であると考え、研究対象として『街は記憶する』を選定した。これは、熊本県熊本市上通界隈に関わりのある人物に「それぞれの上通」について聞き取り調査を行い、その証言をまとめた書籍である²³⁾。すなわち、その証言は既往研究と同様に、調査対象者に聞き取り調査を行うことで得た生活史であると捉えることができる。

研究対象である本書の中には、8人の人物の証言が記録されている。本論では、この8人の証言録について分析を行う。表-1に、各人物の概要を示す。

(3) 分析対象と分析手法

日本語文法について様々な研究が行われており、そのひとつに松下文法がある。松下文法とは、明治から昭和初期にかけて活躍した松下大三郎による学説（一般理論文法学）で、日本最初の口語文法論ともいわれている²⁴⁾。その特徴は、文章を構造的に分析し、詞の相関論によって各詞の関係性にまで言及していることである。本論では、この松下文法をもとに詞句の抽出を行う。また、抽出した詞句について詞の相関論に基づいたルールによる図化を行い、人が生活風景をどのように捉えているのか、その認識構造を把握する。

表-1 記録された各人物の概要（「街は記憶する」より抜粋）

	性別	生年	職種
1	男	1912	商店
2	男	1922	商店
3	男	1922	商店
4	女	1923	飲食店
5	男	1926	商店
6	男	1915	卸商社
7	男	1928	食料店
8	男	1927	会社員

【文】

私の祖父の源吉は、もともと、大通りのいまの「ダイエー」の一角で「布屋」という旅館をやっており、宿泊費の安い大衆的な宿で繁盛したようです。

助辞を手掛かりに分割

【詞句】

私の祖父の源吉は／もともと／大通りのいまの「ダイエー」の一角で／「布屋」という旅館を／やっており／宿泊費の安い大衆的な宿で／繁盛したようです／

助辞を手掛かりに名詞句・述部を抽出

【名詞句・述部】

私の祖父の源吉は／
／大通りのいまの「ダイエー」の一角で／「布屋」という旅館を／やっており／
宿泊費の安い大衆的な宿で／繁盛したようです／

図-1 抽出の流れ

3. 分析対象の抽出

(1) 抽出方法

本論では、名詞句を記憶の中の生活風景を構成する要素と仮定し、名詞句全てを分析対象とする。これは、要素を特定せずに人間の生活とその生活風景がどのように捉えられているのかを把握するためである。また、本論の分析対象は名詞句で、関係性の把握に述部が必要となるが、副詞の断句については分析対象外とする。図-1に、抽出の流れを示す。

(2) 抽出結果・考察

(1)で示した抽出手法によって、分析対象『街は記憶する』から1799要素を抽出した。抽出した要素は人、物、場所、事象、時間の5項目に分類することができ、各項目をさらに細分し、全要素を15種類に分類した。表-2に、抽出及び分類結果を示す。

この結果より、既往研究で抽出される場に関する要素は全体の12.0%であり、地域特性として扱われていた自然物や人工物といった物に関する要素も全体の12.5%となっている。つまり、これまでの既往研究で扱っていた要素は、記憶全体において12%前後の存在ということがわかる。

要素が客体的関係に多いのは、抽出時に「勉強をする」という句を「勉強を」という行為と「する」という述部に分けたためと考えられる。また、「だれいふ事も無く『えらいこつになったパイ』と一同、真っ青になりました」という文章には、発言内容である『えらいこつになったパイ』を発言という行為として捉えたために、客体的関係において行為に関する要素が最多となったとも考えられる。客体的関係における名詞句は動作の対象であるから、こうした行為は動作の働きかける対象として認識される傾向にあると考察できる。

c) 実質的關係

表-3より、全要素において、最も多い関係は実質的關係である。そのうち、状態に関する要素が220個と最も多く、全ての要素と関係においても最多である。実質的關係の名詞句は、述部または主体に対して意味を補完するものである。つまり、要素から要素への働きかけ、あるいは要素そのものの意味を補完するために状態という視点を用いて認識していると考えられる。

次に、修用的関係も含めた日時に関する実質的關係の要素は、状態に次ぐ194個となっている。時間に関する要素も状態と同様に、状況を補完する役割として捉えられる傾向にあるということが出来る。また、「初めは」や「次いで」など頻度や順序のように副詞に含まれる内容が名詞句として出現した場合、実質的關係としてのみ出現することが明らかとなった。

以上より、クロス集計を行うことで、各関係における要素の出現傾向を把握した。その結果、状態や日時に関する要素を実質的關係として多用することで、意味を補完しながら状況を述べる傾向にあることがわかった。また、主体的関係における要素では無生物主語の要素数が個人に関する要素よりも多く出現しており、その場合には話し手である個人が状況を認識する者として存在していると捉えることができた。そして、客体的関係における要素には行為や場所に関する要素が多く、動作の働きかける対象として行為や場所を捉える傾向にあることが明らかとなった。

5. 要素間の関係と認識構造

(1) 文章の図化の目的

本章では、文法に基づいた図化を行うこととし、作成した図から体験の記述における生活風景の認識構造を把握する。

(2) 図化のルール作成

本論は、文法構造をもとに図化を行い、生活風景の認識構造を把握する。この時、人や物など具体的な要素の

図を描くのではなく、要素としての単語とその関係だけを用いて図化を行う。図-2に、図化のルールを示す。

最初に、各要素について、要素を囲んだ円の線種による分類を行う。次に、各要素間の関係性について、目的語であれば矢印を主語から引く。また、述部に対する補語であれば矢印に、名詞句である要素に対する補語であれば対応する要素との間に二重線を引く。この矢印と二重線によって、各要素がどの要素に対してどの関係性にあるのかを表現する。なお、同一文章内に書かれている要素同士は線で結ぶ。これは、同一文章内の要素の繋がりを明確にするためである。

文章中には「精養軒という有名な料亭の庭」にある「大きな楠」のように、ある要素の中に別の要素が含まれている場合がある。この場合は、その要素がどの要素の中に含まれているかを明確にするために、含まれる「大きな楠」という要素を、含んでいる「精養軒という有名な料亭の庭」という要素の内部に記述し、精養軒という有名な料亭の庭」を包括要素と定義する。

また、「上通の商店街」と「通り」のように、異なる表現で同じものを示す要素もある。この場合は、全て同じ要素を示しているとみなし、ひとつの要素に円を重ねることとした。このように、円の重なった要素を繰り返し要素と定義する。

以上のルールに基づいて、生活史の図化を行う。なお、本研究では、1人の文章において、1章分の文章を1枚の図として図化することとした。これは、編集者の意図によるものではあるが、全体をまとまりごとに分節して捉えたものが章であると考えられるからである。

(3) 図化・考察

図-3に、図化した一例を示す。8人の記述をもとに、56枚の図を作成した。これらの図について、包括要素と繰り返し要素に着目して考察を行う。

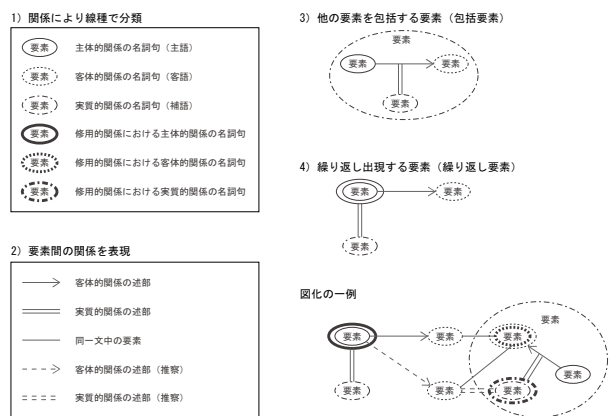
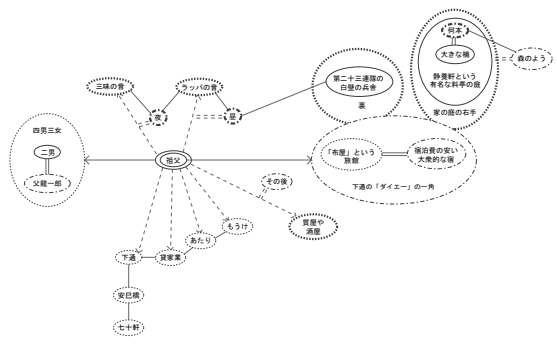
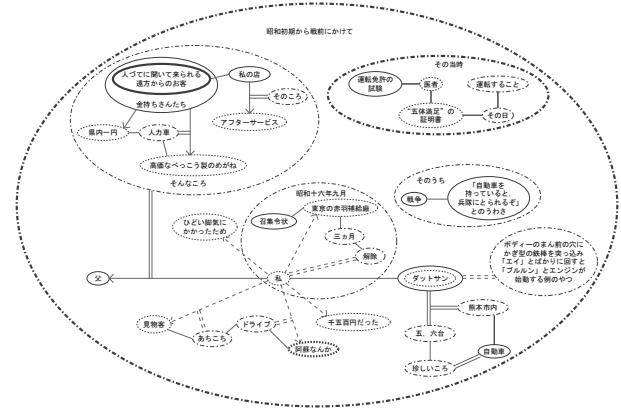


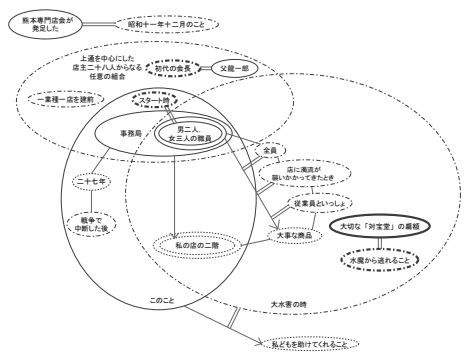
図-2 図化のルール



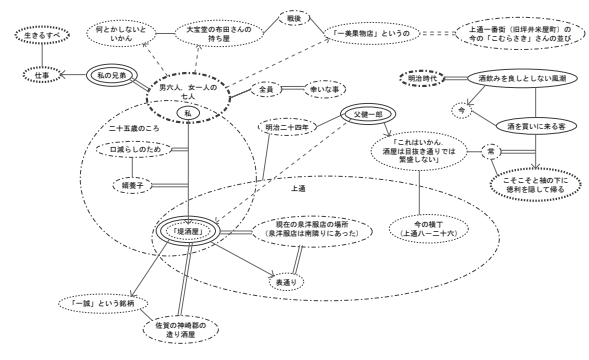
A



B



C



D

図-3 図化の一例

a) 包括要素

まず、包括要素の有無で分類を行い、包括要素が全ての要素を含むかどうかで分類する。この時、包括要素と繋がる要素が包括要素外に存在する場合がある。この場合には、その要素も包括要素に関連する要素であるから、全ての要素を含むものと捉えた。その後、包括要素の数によって更に分類を行った。分類結果を、図-4に示す。

図-4より、1枚の図において包括要素が全ての要素を含んでいる図は10枚であった。この場合、話し手は大きくひとつの情況として何かを捉え、その中での細かい情況を更に述べている。この大きくひとつの情況として捉えた要素は、ひとつの記憶の大きな集合体を形成していると考えられることができるため、包括要素は記憶の集合体を表現したものだと考察する。

部分包括している図のうち、それぞれが独立して包括している個別型は16枚、包括要素の中に包括要素がある内包型は20枚、包括要素が重なり合う重複型は4枚あることがわかった。個別型の場合、図-3Aの「下通りの『ダイエー』の一角」や「四男三女」のように、ひとつひとつの包括要素が、それぞれひとつの記憶の集合体を表現

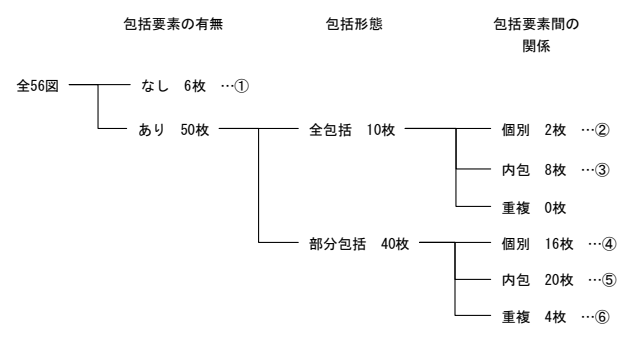


図-4 包括要素の分類結果

している。一方、図-3Bのような内包型では、ひとつの記憶のまとまりの中に記憶のまとまりが存在し、大きな記憶の集合体について更に詳しく説明していると考えられる。更に、重複型である図-3Cのような場合、記憶の集合体が重なり合っていることになる。この重複型において、重複している要素に着目すると、「男二人、女三人の職員」「私の店の二階」のように重なっている部分の要素は繰り返要素として出現している。あるいは図-3Dのように、「男六人、女一人の七人」の中にも含まれる「私」という要素を特定することで、他の包括を形成する場合もある。つまり、重複型の包括要素では、記憶の集合体

が重なり合っており、重複部分に含まれる要素は異なる記憶の集合体を繋ぐ結節点となると考えることができる。

以上より、包括要素は複数の要素を記憶の集合体として認識しており、その認識形態には個別型、内包型、重複型の3種類あることが明らかとなった。また、重複型において、重なり合った部分に含まれる要素は、記憶を繋ぐ結節点となることがわかった。

b) 繰り返し要素

a)より、重複型において、重なり合った部分に含まれる繰り返し要素や何かを特定した要素が、記憶を繋ぐ結節点として機能することが明らかとなった。そこで、次に繰り返し要素に着目し、考察する。

図-3A「祖父」のように繰り返し要素が1個の場合、その要素を中心として体験が繋がるような図となる。しかし、図-3Dのように、繰り返し要素が「私の兄弟」「堤酒店」「父健一郎」と複数である場合、体験の中心が分散しているかについて図から判断することは難しい。これは、図-3Dでは繰り返しの回数がそれぞれの要素で異なっており、より多く繰り返される「堤酒店」という要素に体験が集中しているように図が描かれているからであると考えられる。つまり、繰り返し要素そのものの特徴には、繰り返しの回数が影響していると推察できるが、具体的な示唆を得ることはできなかった。

また、図中には推測による矢印や二重線という推測線が引かれている。推測線は、主語の省略によって発生する。図-3A「祖父」は繰り返し要素として出現していると判断できるが、図-3Bの「私」を繰り返し要素と判断することはできない。つまり、推測線からわかる繰り返し要素については、主語の省略だけではなく推測線そのものが不確定なために、繰り返し要素として出現していない場合や省略されている場合があると考えられる。以上より、繰り返し要素について考える際には、推測線そのもののあり方について、今後更に検討する必要がある。

以上より、重複型の包括要素内における繰り返し要素は包括要素同士を繋ぐ結節点として機能していると考えられるが、全ての繰り返し要素の特徴を把握することはできなかった。今後は、繰り返し回数、推測線のあり方、推測線からわかる繰り返し要素の扱い方について、検討が必要である。

6. 生活風景の認識構造

5章で考察した「包括要素」と「繰り返し要素」という2つの関係についてクロス集計を行い、4章で得た考察と比較することで、人の体験から読み解く生活風景の認識構造を明らかにする。

(1) 包括要素

包括要素について、横軸に要素の種類、縦軸に詞の関係性を用いてクロス集計を行った。表-4に、集計結果を示す。

図-3Aにおける「昭和初期から戦前にかけて」「昭和十六年九月」や図-3C「任意の組合」「大水害の日」といった包括要素は56枚中に141個存在する。そのうち、客体的関係の場所に関する要素が最多であり、実質的關係の日時、実質的關係の場所が続く。日時に関する要素は、目に見えず手に触れることができない物事についての表現である。場所に関する要素は、目に見えて手に触れることができる要素ではあるが、「商店街」「店の前」「軒下」のように、空間的な広がりのある要素として認識されているとも考えることができる。

また、目に見えず手に触れることができない事象や時間に関する要素の合計個数は66個となる。これは、3章(2)で述べたように、目に見えず手に触れることができないような事象や時間についての表現の方が多く用いられるという傾向とも合致する。事象や時間は、目に見えず手に触れることはできないが、「昭和初期から戦前にかけて」という時間的な広がりや、「任意の組合」という集団のように、何かしらの広がりやまとまりを持つ要素と考えることができる。つまり、空間的あるいは時間的な広がりやまとまりを持つ要素が、包括要素となる傾向にあるといえる。

(2) 繰り返し要素

繰り返し要素について、(1)同様にクロス集計を行った。表-5に、その集計結果を示す。横軸は要素の種類、縦軸は出現時の要素の関係を表している。

表-5より、修用的関係における主体的関係も含む全ての主体的関係のうち個人に関する要素は61個抽出されており、残る54個は個人以外を主体として捉えていることがわかる。これは、4章(3)で述べたように個人以外を

表-4 包括要素のクロス集計結果 (個数)

	人		物				場所	事象					時間			計	
	個人	法人	自然物	人工物	生物	その他		状態	行為	出来事	五感	数量	日時	頻度	順序		
主体	7	1	0	5	0	4	1	1	4	5	0	0	0	0	0	0	28
修用主体	7	1	0	5	0	4	1	1	4	5	0	0	0	0	0	0	5
客体	5	1	1	2	1	3	15	3	3	3	0	0	0	0	0	0	37
修用客体	5	1	1	2	1	3	15	3	3	3	0	0	0	0	0	0	10
実質	0	2	0	0	0	2	13	3	1	4	0	0	12	22	0	0	37
修用実質	0	2	0	0	0	2	13	3	1	4	0	0	12	22	0	0	24
計	12	5	1	7	1	10	39	9	12	23	0	0	22	0	0	0	141

主体として認識している場合と合致する。しかし、繰り返し出現する要素では主体的関係における要素 115 個のうち個人以外の主体の割合は 47.0%であるのに対し、全要素内の主体における個人以外が占める割合は 52.1%である。つまり、主体としての要素は個人以外の要素の方が多く出現するが、個人に関する要素は繰り返し出現する傾向が強いといえる。

このように、繰り返し要素の種類とその関係についてクロス集計から把握することはできた。しかし、5章(3b)で述べたように、図化による結果から繰り返し要素全体の特徴を把握することはできなかった。

(3) 生活風景の認識構造

(1)において、包括要素は空間的あるいは時間的な広がりやまとまりとして認識されていると推察した。これを、内包型である図-3Aを例として考える。「昭和初期から

戦前にかけて」という時間的な広がりを表す記憶の集合体の中に、「そんなころ」「その当時」「そのうち」「昭和十六年九月」という時間に関する要素が記憶の集合体として表現されている。また、「そんなころ」という記憶の集合体の中には「金持ちさんたち」という包括要素があり、「金持ちさんたち」というまとまりを表す要素の中から「遠方からのお客」という要素を特定している。この包括の様相を図にすると図-5のようになり、包括要素による記憶の集合体は面的結合として互いに繋がっているといえる。

この面的結合による記憶の集合は、一人の記憶の中の一つである。この面的結合による記憶の集合が、複数人に共通する場合がある。研究対象の『街は記憶する』において、複数人に抽出されている包括要素の例として、「上通」が挙げられる。この「上通」に包括されている要素のうち、複数人に共通して出現する要素のひとつと

表-5 繰り返し要素のクロス集計結果 (個数)

	人		物					場所	事象					時間						
	個人	法人	自然物	人工物	生物	その他	場所	状態	行為	出来事	五感	数量	日時	頻度	順序					
主体	53	19					4												217	230
修用主体	8	3	2	11	1	1	4	1	6	7	3		0		1	0		13		
客	16	21					19											176	196	
修用客	2	4	0	6	1	8	5	3	2	4	2		0		0		0	20		
実	4	1					2											50	56	
修用実	4	1	0	0	0	4	1	2	1	2	3	1	2	4	5	0	0	6		
	83	49	2	19	2	18	31	6	12	9	2	2	6	0	0			482		

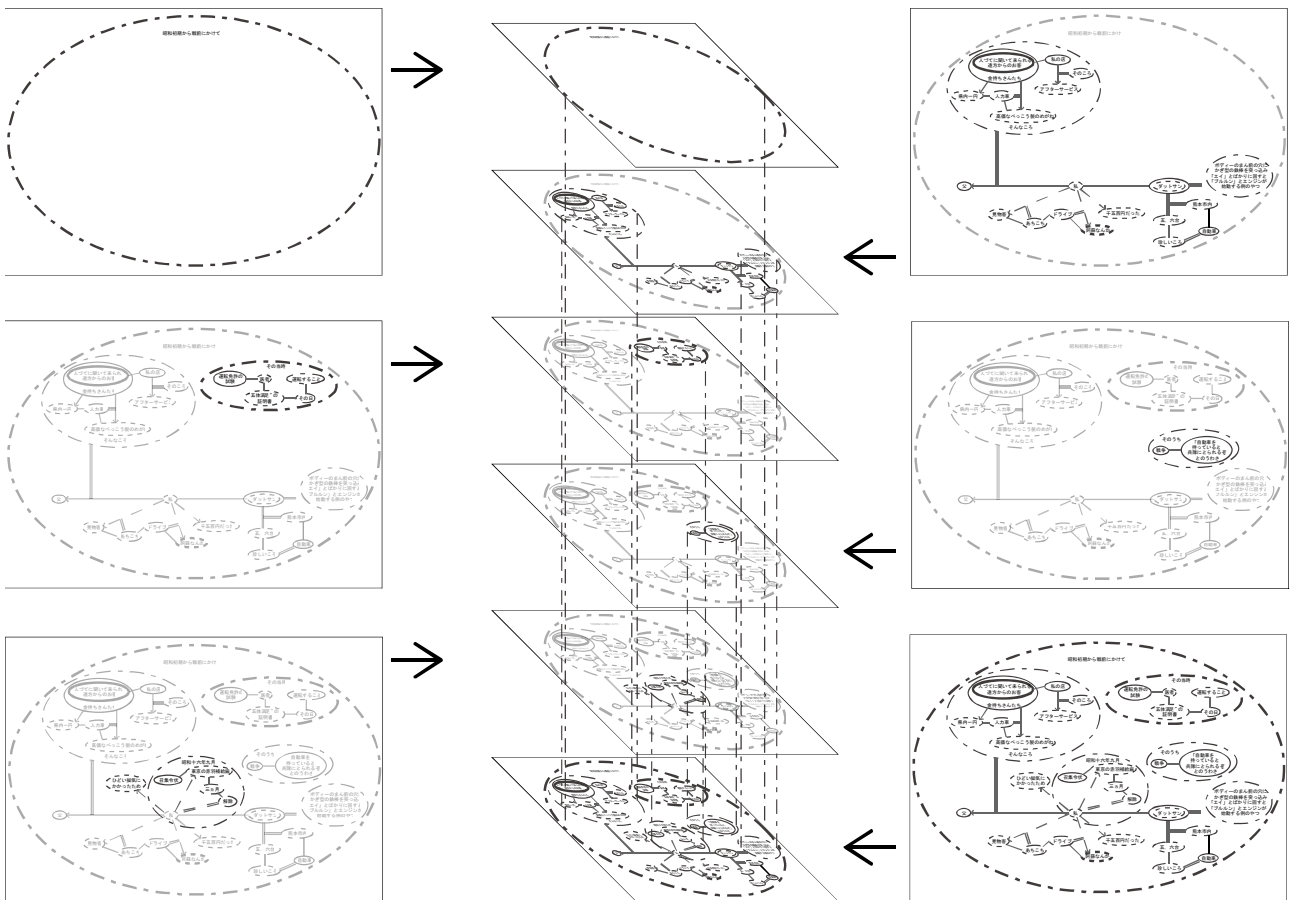


図-5 面的結合による体験の認識構造 (図-3Aを事例として)

して「招魂祭」があった。つまり、地域の記憶として認識されている「上通」において、「招魂祭」が複数人の共通した出来事であると認識されている。この「上通」という包括要素と包括されている「招魂祭」のように、複数人の記憶の集合体が地域の記憶として存在し、その地域の記憶として含まれている要素や共通する要素が、まちづくりへと結び付く重要な手掛かりとして活用できるのではないだろうか。

次に、繰り返し要素の特徴について、5章(3)a)では包括要素が重複型の場合に繰り返し要素が結節点となり得ると推察した。よって、包括要素が重複型である図-3Cを例として、繰り返し要素による体験の記述の認識構造を考察する。図-3Cにおいて、記憶の集合体である包括要素は「任意の組合」「事務局」「このこと」「大水害の時」の4個である。これらの包括要素について、「男二人、女三人の職員」が「任意の組合」と「このこと」を繋ぎ、「男二人、女三人」と「私の店の二階」が「このこと」と「大水害の時」を繋いでいる。この様相を図にすると図-6のようになる。つまり、異なる記憶の集合体という面的な広がりを持つ要素を、繰り返し要素が結節点として記憶の集合体を繋ぎ合わせながら、体験として認識しているといえる。

面的結合において、「上通」という包括要素の中にある「招魂祭」が共通認識された要素であると述べた。この「招魂祭」のうち、一人の記憶の中で「舞台」が繰り返し要素として出現している。別の人物の記憶にも「舞台」という要素は出現しており、これに繋がる体験も記述されている。このように、複数人の体験を繋ぐ繰り返し要素を把握することで、不特定多数の体験を繋ぐ景観検討に活用できると考えられる。

しかし、繰り返し要素が結節点となり、点的結合として体験を認識しているという考察は、包括要素が重複型である場合から導き出したものであり、他の場合について、あるいは繰り返し要素そのものについての傾向とは断定できない。よって、今後は全ての繰り返し要素が結節点となり点的結合を形成することで体験を認識しているかどうか、検証することが課題である。

以上より、生活史という体験の記述を文法に則って読み解き図化することで、包括要素が面的結合によって記憶の集合体を形成していると示唆した。また、包括要素の重複型における繰り返し要素について、記憶の集合体である包括要素を点的結合によって繋ぐ結節点となっていると推察した。そして、包括要素は地域の記憶を活かしたまちづくりへ、繰り返し要素は体験を繋ぎ合わせる景観検討へ活用できることを示唆した。

7. まとめ

(1) 結論

以下に、本論で得られた結論を示す。

- a) 文法に則って抽出した要素（名詞句）1799個を、人物、場所、事象、時間の5項目に大きく分類し、各項目を更に細分することで、抽出した要素の傾向を把握することができた。
- b) 抽出した要素の種類と詞の相関論に基づく要素間の関係性によるクロス集計から、要素の特徴を把握した。
- c) 図化を行うことで、包括要素と繰り返し要素という2つの視点から、作成した図の特徴を把握した。
- d) 包括要素が、面的結合によって記憶の集合体を形成し

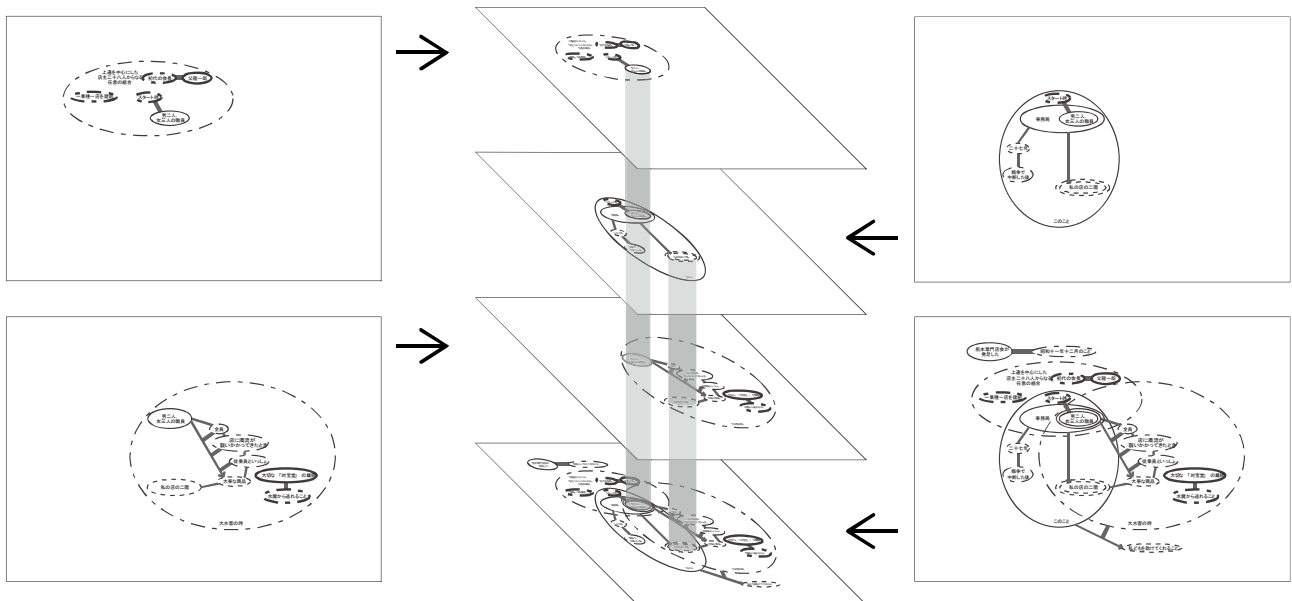


図-6 点的結合による体験の認識構造（図-3Cを事例として）

ていることを明らかにした。また、包括要素の重複型における繰り返し要素について、記憶の集合体である包括要素を点的結合によって繋ぐ結節点となっていると推察した。

e)包括要素は地域の記憶を活かしたまちづくりへ、繰り返し要素は体験を繋ぎ合わせる景観検討へ活用できることを示唆した。

(2) 今後の展望と課題

本研究は、体験として語られた生活史を読み解くことで、包括要素という面的結合によって人は記憶の集合体を形成していることを明らかにした。また、包括要素の重複型における繰り返し要素が、記憶の集合体である包括要素を点的結合によって繋ぐ結節点となっていると推察した。このように、文章の意味ではなく文法構造から生活風景の認識構造が明らかになれば、集めた地域住民の証言を文法で読み解くことで、地域住民の記憶を把握することができる。そして、それらの記憶から結節点となる要素やまとまりを形成する要素を手掛かりとして、地域の記憶を活かしたまちづくりや複数人物の体験を繋ぐ景観整備へと展開することができるのではないだろうか。

しかし、5章(3)にて推測線のあり方に問題があり、図化から繰り返し要素の特徴を把握することができなかつた。よって、推測線のあり方を含めた図化の方法や繰り返し回数の意味するところなどについて精査し、繰り返し要素の傾向や特徴から繰り返し要素による認識構造を明らかにすることが課題として挙げられる。

参考文献

- 1) 風景デザイン研究会：風景のとらえ方・つくり方 九州実践編,共立出版,4p,2008.
- 2) 堀繁,栗原正夫,篠原修：体験された風景の構造,造園雑誌 Vol.51, No.5, pp.287-292,1988.
- 3) 茂原朋子,渡辺貴介,十代田朗：青年の“原風景”の特性と構造に関する研究,日本都市計画学会学術論文集, No.26, pp.457-462,1991.
- 4) 仙田満：原風景によるあそび空間の特性に関する研究 ー大人の記憶しているあそび空間の調査研究ー,日本建築学会論文報告集, Vol.322, pp.108-117,1982.
- 5) 岩永敬造,松本直司：都市の心象風景に関する研究ー長野市の心象風景のイメージ構造についてー日本都市計画学会学

術研究論文集,,No.28,pp.451-456,1988.

- 6) 西村匡達,松本直司,寺西敦敏：都市の心象風景の形成・想起要因に関する研究,日本都市計画学会学術論文集, No.27, pp.721-726,1992.
- 7) 渡辺成博,松本直司,高木清江：心象風景の形成過程と現実の空間形態,日本都市計画学会学術論文集, No.31, pp.175-180,1996.
- 8) 小林規久男,志摩邦雄,小柳武和：世代間の心象風景からみた農村景観の構造化に関する研究,日本都市計画学会学術研究論文集, No.31, pp.643-648,1996.
- 9) 齋藤達哉,松本直司,高木清江,瀬尾文彰：都市の心象風景の形成要因と場面的特性に関する研究,日本都市計画学会学術論文集, No.32, pp.325-330,1997.
- 10) 山口美緒,横張真,渡辺貴史：住工混在地域における居住者の心象風景の解明,日本都市計画学会学術研究論文集, No.36, pp.745-750,2001.
- 11) 池田朋子,紺野昭：文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究 小説『城のある町にて』をケーススタディとして,日本建築学会計画系論文報告集, No.450, pp.121-130,1993.
- 12) 池田朋子,大貝彰：文学作品中の空間描写にみる都市景観に関する研究ー高山のケーススタディー,日本都市計画学会学術研究論文集, No.28, pp.583-588,1993.
- 13) 池田朋子,大貝彰：高山の地方文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究ー文レベルの分析を通じてー,日本都市計画学会学術研究論文集, No.29, pp.601-606,1994.
- 14) 北原理雄：校歌に謳われた都市の景観構造に関する研究ー伊勢平野の3都市を事例にー,日本都市計画学会学術研究論文集, No.25, pp.673-678, 1990.
- 15) 前掲11
- 16) 前掲14
- 17) 前掲12
- 18) 矢部恒彦,北原理雄,徳山郁芳：小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究,日本建築学会計画系論文集, No.472, pp.111-122, 1995.
- 19) 柳川正宏,仲間浩一：複合表象としての都市景観に関する研究ー江戸名所図会を対象としてー,日本都市計画学会学術研究論文集, No.31, pp.181-186, 1996.
- 20) 吉村晶子,アンドレア・ヤニッキー,橋本健一,中村良夫：「おくのほそ道」における風景の動的生成手法に関する研究,ランドスケープ研究, Vol.60, No.5, pp.567-572, 1997.
- 21) 吉村晶子：「東関紀行」の分析を通じた動的風景記述モデルの構築,ランドスケープ研究, Vol.61, No.5, pp.675-680,1998.
- 22) 前掲10
- 23) 上通商栄会編：街は記憶する,上通新書, pp.185-187,2004.
- 24) 徳田政信：図説松下文法ハンドブックー一般理論文法の先駆ー,勉誠出版,6p,2006.
- 25) 鈴木一：松下文法論の新研究, 勉誠出版, pp.26-34, 2006.